愛知淑徳大学論集―文学部・文学研究科篇―　第36号　2011.3　15-24

混乱するジェンダー / セクシュアリティ

―― E. M. Forsterの“Other Kingdom”における男性性の揺らぎ

Reconfiguration of Gender and Sexuality: Ambiguous Masculinity in E. M. Forster's “Other Kingdom”

平　林　美都子
HIRABAYASHI, Mitoko

E. M. Forsterの短編小説“Other Kingdom”は1909年、*English Review*の7月号に発表された。フォースターの作品によく見られる対立の図式―文明と自然、因習的考えと自由思想、英国と異国―はこの短編にも顕著である。これに加えて、ダフニの変身譚を物語構造に利用したり複数のギリシャ神話をモチーフにしたりするなどの明示的な言及は、一見「アザー・キングダム」の解釈を容易にしてくれるようだ。それは、二つの価値観が衝突するなかで、最後に女主人公イーヴリンが自然と一体となって自由を得るという解釈である。プロットの明快な読解が可能な一方、同時期に創作された長編小説*The Longest Journey*との類似的な描写・人物造形やオイディプスへの暗示的言及などを含めて考えると、この短編が一筋縄ではいかないテクストであることも事実だ[1)]。少なくとも、*Maurice*出版以後の読者にとり、フォースター作品の表向き読解の残余となるものや暗示レベルで容易に解釈されないものに注目することは、不可欠な作業であろう。本稿の目的は、ほぼ同時期に創作された『いと長き旅路』を参考にしながら、「アザー・キングダム」の男性性を考察することである。

1．父亡き子と金

E. M. フォースターの作品には「父」の存在の希薄なものが目に付く。*The Longest Journey, The Room with a View, Howards End*など、父の不在は登場人物の性格造型に直接的・間接的に影響を与え、プロットに寄与している。短編小説は長編小説ほど際立ってはいないが、“The Purple Envelope”や“Other Kingdom”では父不在がプロットに影響を与えている。「アザー・キングダム」の主な登場人物は、Worters一家とその関係者（Harcourt Worters、彼の母、二人の妹、Mrs Osgood）、ハーコート・ワーターズの婚約者Evelyn Beaumont、彼が後見している若者Jack Ford、フォードの家庭教師Inskipである。ワーターズの父はすでに亡く、彼が家督を相続している。いや正確に言えば、彼は家・屋敷を父から相続したのではなく、自分自身で手に入れたのである。

I got this house, and the very lawn you are standing on, on a lease of ninety-nine years. (63)[2)]

加えて、土地が99年の借地契約だということは、彼には未来の子孫に継承していく土地がないことを意味している。結局、ワーターズの家督も家父長権威も限定的だったのである。

ワーターズの屋敷に居住している三人も、彼と同じく父亡き子である。彼らとワーターズとの間には、親戚縁者などという必然的なつながりがあるわけではない。イーヴリン・ボーモントはワーターズの婚約者だが、「金もない、親戚縁者もない、祖先もない」(67) 彼女は、アイルランドからワーターズによって「拾われた」のである。大学入学試験を間近に控えたフォードも、金がなく、身寄りとしてはロンドン郊外の叔母しかいない。彼がワーターズの好意で屋敷に住んでいる「孤児」であることは、容易に推測できる。インスキップも財産がないために住み込み家庭教師をして生計を立てていることは、雇い人としてのワーターズに気を使っていることから想像される。

本短編には、孤児または孤児に似た状況の三人が、どういう経緯でワーターズの屋敷に住むようになったのかという説明はまったくない。ワーターズはイーヴリンにとっては婚約者、フォードにとっては後見人、インスキップにとっては雇用者である。それぞれの立場は異なるにせよ、彼らがワーターズと金銭的関係にあることだけは明らかだ。つまり経済的にワーターズに頼っているという意味で、彼らはいずれも従属的な立場にいるのである。イーヴリンは婚約者といえども、決してワーターズと対等ではない。なにしろ「金もない」彼女は「拾われた」のだから。とはいえ、ワーターズの方も無料(ただ)で彼女を妻に迎えようとしているのではない。「いつかイーヴリンが僕に何千倍も払い戻してくれる」(67)という言葉には、見返りを期待する彼の真意が露わになっている。物語が進むにつれ、イーヴリンがワーターズに対して自分の主張をすることができなくなっていくのも、彼女の立場の弱さを示している。フォードの後見にしても、ワーターズが自分の利益を優先しているのは、当然推測できる。その証拠に、彼に楯突いたフォードはすぐさま屋敷から追い出されるのである。雇用者であることを殊更意識するインスキップにいたっては、ワーターズとの関係がどのようなものなのかはいうまでもない。

この短編に垣間見られるように、フォースターは「金のつながりcash-nexus」による人間関係に批判的だった。同時期に執筆された『いと長き旅路』においてPembroke兄妹の拝金ぶりは、風刺的に描かれている。すでにヴィクトリア朝初期、Carlyleは*Past and Present*の序文において、手に触れるものすべてを金に変えるミダス王を比喩として持ち出し、拝金主義を激しく批判していた。それから60年後、「アザー・キングダム」において、ミダス王は拝金主義の象徴として扱われている。「ミダス王から逃げる方法はない」(60) と言うフォードのからかいは、物語終盤のワーターズとイーヴリンの関係の伏線となっていく。ワーターズにとり財力は父の権威の代替物である。イーヴリンの意に反して、彼がアザー・キングダ

ムを囲い込んでいくことは、経済力によるイーヴリンの束縛を暗示しているといえるだろう。

2．実利的世界観

Judith Scherer Herzは「実利的/実質的」（practical）世界と「純粋な」（absolute）世界という二項対立が、「アザー・キングダム」のみならずフォースターのすべての作品を支配していると言う（32）。“Practical”はギリシャ語の「実行に適した」を意味する“praktikos”を語源とし、“absolute”はラテン語の“absolutus”を語源とし、「〜から自由にされた、解放された」という意味である。『いと長き旅路』を例にとると、自由と真理を象徴するケンブリッジは、実利的・実際的なソーストンと対照されている。そして前者を代表するのがAnsell、後者がペンブルック兄妹である。

実利的世界を代表するものは何といっても貨幣経済である。モノ自体の価値ではなく実利性や有用性により、交換価値がカネに換算される。ミダス王ならぬワーターズが“practical(ly)”という表現を口癖にするのは、人物設定から考えるとまことに当然だといえよう。彼はイーヴリンへのプレゼントだとして、アザー・キングダムを99年間の借地契約で手に入れる。「永遠に」自分のものだと喜んだイーヴリンは失望するが、ワーターズにとって自分の存命中に所有権がありさえすれば、「99年は実利的永遠」（63）なのである。家・土地をめぐり、財産という実利的価値でしかとらえられないワーターズと、土地との純粋な結びつきを重んじるイーヴリンとの対立する価値観は、*Howards End*においてさらに発展していくテーマとなる[3)]。

インスキップの思考様式もまた「実利的/実質的」である。ヘルツが指摘するように、インスキップは「実利的世界の体現者」（32）である。彼はワーターズに雇われていることを常に意識し、「ミスター・ワーターズ」（61）と敬称で呼び、「使用人がすべきように」（75）振舞う。彼は古典学の家庭教師としてだけでなく、こうした付加的な有用性を見せることによって、生徒（フォード）がいなくなった後も、秘書として居残ることができるのである。

インスキップの観察によると、フォードはお仕着せを着た従僕や銀のヤカンが理解できず、「そういうものを見ると腹を立てた」（65）。インスキップ自身「あらゆる物はそれ自体であって、実質的にその他のものではないことを知っていた」が、あらゆる事象を自分の利害関係から考える彼には、現実の生活に有用性を持たない「純粋な」価値を理解することはできないのである。

古典学に関しても、インスキップとワーターズは、フォードやイーヴリンと全く異なった見方をする。インスキップはワーターズ夫人に、現代生活の起源を知るために古典は必要だと説明するものの、現実には彼にとり、古典は生活の糧を得る手段だった。同様に、古典はフォードの大学入学試験に必要だと実利面を重視するワーターズは、イーヴリンにとっての

実利的意味を見つけることができないので、勉強を中止させる。

他方、事物の「純粋な」意味/価値を重んじるフォードには、ギリシャ神話のアポロンやパンの神秘は、そのままで意味を成している。

> “Apollo wants to give you a music lesson. Well, out you pop in to the laurels. Or Universal Nature comes along. You aren’t feeling particularly keen on Universal Nature. So you turn into a reed.”（60）

ラテン語を学び始めてまもないイーヴリンもまた、古典は「非常に自然で、物事をそのまま書き記している」（69）から、好きだと言う。二人は事物の現実的な利益を重視せず、あるがままの事物を受容しているのである。

3．英国的権威

こうした実利性は19世紀の英国的合理性、帝国主義精神と繋がっていく。フォースターは1920年、“Notes on the English Character”の中で、国民の欠点として中産階級の想像力の乏しさと偽善的態度を挙げている[4)]。知性はあるけれど心情が未発達な人物といえば、『いと長き旅路』のハーバート・ペンブルックをすぐさま想起するだろう。こうした国民性こそが英国的権威を作り上げていったのである。「アザー・キングダム」には、ティーをはじめ、英国の宗教や文学へ言及が繰り返されることで、その優位性がほのめかされている[5)]。

前にも触れたように、ワーターズはイーヴリンのラテン語の勉強を中止するように、インスキップに伝えた。教養としてのラテン語の価値を認めないワーターズは、彼女が英語/英文学を学ぶ方がより実利的だと考えたのだ。しかし従来、オックスフォードやケンブリッジ大学では学生が英文学を学ぶことはなかった。ギリシャやラテンの古典学こそが学問であり、高等教育を受けることができる特権階級の人々は、こうした教養にこそ純粋な価値を見出していたのだった。ところが、イギリスが帝国へと国威を高めていく過程で、英文学は「国家の誇りや道徳的価値を教えるため」の学問となっていく（Eagleton 27）。もっとも、英文学が大学で学ぶ教科となるのはまだ先のことであり、それは女性の学ぶもの、いわば二級の学問だと考えられていた。フォースター自身もパブリックスクールや大学で学んだのは古典だった。ワーターズがイーヴリンに英文学を薦める背景には、こうした過渡的な事情があったのだ。

しかし、ワーターズが英文学をイーヴリンに薦めた理由は、それが女の学問だというだけではもちろんない。外国人（アイルランド人）のイーヴリンに英国文化を学ばせ、その優位さを教えることがぜひとも必要だったのである。イーヴリンの失踪後、ワーターズは「野蛮人同然だった彼女を見つけ出して教育してやった」（84）と言って、他民族を侮蔑する言葉

をあからさまに口にする。20世紀初頭、ヴィクトリア朝の終焉とともにイギリス帝国主義が陰りを見せはじめたとはいえ、多くの植民地を抱えた国力は依然、他国を凌いでいた。イギリスにとり、アイルランドは「野蛮な」国なのだ。そのような時代、アザー・キングダムの購入は、その名前が示すように、まさに他国を所有し従属させることに他ならなかったのである。

英国的権威を誇示する指標として使われているもう一つが、Archdeacon（英国国教会の主教）の存在である。主教が作品中に登場することはないが、3度も言及されているのは、英国国教会の権威を強調するためであろう。教会の重要な役割の一つは結婚の承認である。英国国教会では3度の結婚予告をした後、4度目に牧師が結婚を執り行うしきたりがある。他方、アザー・キングダムでは、4度目にはブナの木に二人の名前を彫りつける習慣があるとイーヴリンは説明する。ところがワーターズは、こうした風習を「変った民間伝承」だと一蹴し、「主教が聞いたら喜ぶだろう」（73）と茶化してしまう。フォースターはキリスト教に批判的だったが、その理由の一つは、キリスト教が帝国主義政策に加担していたためだった。ワーターズが帝国主義の立場に立ち、英国国教会の価値観を歴史や文化の指標とし、他の文化・風習を見下しているのは明らかである。

4．男性性のほころび

すでにみてきたように、ワーターズの男性性は「経済力」によって保持されていた。家父長権威の象徴である土地・家屋は彼の代になって購入して造ったもので、インスキップに「ワーターズの邸宅は水腫でふくれた田舎家のように見え」（68）ると皮肉られている。ワーターズによれば、アザー・キングダムは10年間で桁外れに値上がりしたそうだ。彼が10年前に購入しなかった理由は、当時の売買契約は「法律上は正しかった」が「道義上は正しくなかった」からだ。ところが、この説明の直後、今回売買した相手がかつての所有者の未亡人だということが暴露されると、ワーターズは途端に話題を逸らしてしまう。こうした態度は彼の性差別主義を露呈することになり、ワーターズの道義心そのものが疑わしくなってしまうのである。自分の善人ぶりを語るとき「ゆで海老のように真っ赤になる」というフォードの記述は、逆にワーターズの偽善者ぶりを戯画化することになる。

「アザー・キングダム」における男性性の揺らぎは、インスキップの語りの役割が大きい。まずは、語り手であるインスキップ自身の女性嫌悪・蔑視のあり様を確認しておこう。女性嫌悪の最初の矛先はワーターズ夫人に向けられる。インスキップは自分の授業を「23回」も中断する彼女を「厄介な女」だと描写する。彼の女性嫌悪・蔑視は、イーヴリンに対していっそう顕著になる。イーヴリンを「『アイルランド』から拾ってきた」（67）と語るのはインスキップである。さらに彼は、イーヴリンの無知な点にも何度か言及する。たとえば、インスキップにとって、古典は「物事をただ書き記すだけ」だとするイーヴリンの説明は「愚

かしい定義」であり、「彼女に何かが欠けているのは公然の秘密」（69）なのである。イーヴリンに対するこうした軽蔑心が最高潮に達するのは、フォードのことで彼女がワーターズに執り成しをしようとするシーンである。彼女の仲裁が失敗することを予期しながら、インスキップは傍観者に徹して、「優しい気持ちも持たず」「興味津々で」眺めるのである。

> She walked confidently across the meadow, bowing to the workmen as they raised their hats. Her languor had passed, and with it her suggestion of 'tone'. She was the same *crude*, *unsophisticated* person that Harcourt had picked out of Ireland — beautiful and *ludicrous* in the extreme, and — if you go in for pathos — extremely pathetic.（78斜体は筆者）

イーヴリンは「粗野な」「洗練されていない」「馬鹿げた」といった嘲笑的な形容詞で描写されている。この光景はインスキップにとって「劇よりも楽しい見世物」（78）であり、イーヴリンが「子どもっぽい」（79）しぐさで後ろずさりして小川に足を踏み入れてしまうシーンになると、「笑劇の大団円」（79）とまで言ってのけるのだ。

英国という権威（＝帝国）を支える男性性にはホモソーシャルな構造が存在する。そのホモソーシャルな構造には女性嫌悪・蔑視の感情が付随する。つまり、英国の/という男性性権威を称揚するためには、アイルランドの/という女性性は蔑視されなければならないのである。イーヴリンのアイルランド性が殊更に強調されるのは、英国（＝帝国）の優位さを誇るためである。そうした思想を体現しているのがワーターズであり、とりわけインスキップであった。

だが、この短編小説にホモソーシャルな関係が本当に存在するのかといえば、はなはだ疑わしい。インスキップはワーターズに対して敬愛の情を示すが、それは「金のつながり」でしかなく、すでに見てきたように、ワーターズの男性性のほころびを指摘するのも語り手であるインスキップだった。彼は男性性が内包するホモソーシャルな構造に加担するようなそぶりをみせつつも、一方ではそれを崩しているのである。インスキップの男性性を説明することはなかなかやっかいである。

だが、次の引用が示すように、インスキップがワーターズの男らしい容姿に魅惑されているのは確かである。

> [...] he is tall and handsome, with a strong chin and liquid brown eyes, and a high forehead and hair not at all grey. Few things are more striking than a photograph of Mr Harcourt Worters.（72）

写真のモデルとしてのワーターズを想定しているということは、彼はインスキップにとって

見られる対象なのだ。この美しい男性像からは太陽神アポロンを連想するのは容易いし、インスキップもワーターズを太陽神のごとく、“stood Mr Worters, radiating energy and wealth, like a terrestrial sun”（76）と描写している。ところが、ギリシャ神話のアポロンのセクシュアリティとなると、実際のところ曖昧である。ワーターズとイーヴリンの関係を示す伏線となっているダフネの変身譚では、アポロンは異性愛者である。他方で、アポロンは男性（ヒアシンサス）を愛する同性愛者でもある。だとすると、アポロン神に喩えられるワーターズのセクシュアリティは、いずれにも同定できなくなってしまう。

ワーターズの異性愛者たる男性性に疑問が生じるのは、アザー・キングダムへピクニックに出かけたときのことである。フォードはイーヴリンに命じられてワーターズ邸を隠すために立っていた。するとワーターズは、フォードの踵を引っかいて倒してしまう。ワーターズがフォードを倒すのは、イーヴリンに従順なフォードへの嫉妬からなのか、あるいは自分の屋敷を見せたいためなのか、理由ははっきりしない。しかし、ここに『いと長き旅路』に見られる同じ光景との関連を見逃すことはできない[6]。ケンブリッジの牧草地でアンセルとしばらく語り合った後、リッキーがアグネスと会うために去ろうとしたとき、アンセルはふざけ半分で「手を伸ばしてリッキーの踵をつかんだ」（*The Longest Journey* 64）。ここには幾人かの批評家が読み取っているように、ホモエロティックな関係が濃厚である[7]。

性のサブテクストの観点から、「アザー・キングダム」と『いと長き旅路』との類似点はそれだけではない。アグネスとジェラルドのラブシーンに遭遇するのはリッキーだったが、短編ではインスキップがその役を担っている。アザー・キングダムのブナの木を数えて上機嫌のイーヴリンとワーターズがまさに抱き合おうという瞬間、それを目撃していたインスキップがわざと音を立てるのである。

> I began to pack up the tea-things. They both saw and heard me. It was their own fault if they did not go further.（72）

インスキップの反応はいかにも思わせぶりである。彼とワーターズが主人/使用人という「金のつながり」だとはいえ、彼のホモエロティックな感情もまた完全には否定できない。

イーヴリンにふさわしい英文学として、ワーターズが*Idylls of the King*のアーサーとグィネヴィアを持ち出したとき、彼の異性愛志向はさらに疑わしいものとなるだろう[8]。テニスンのアーサー物語から、ランスロットならぬフォードがイーヴリンを横恋慕するという伏線を読みとることは、まずは常道である。しかしながら、ここで見落としてならないのは、テニスンの牧歌では、アーサー王の男性性の揺らぎやランスロットとのホモエロティックな関係が各所にほのめかされている点である。こうした暗示的な言及から、ワーターズの異性愛者たる男性性は限りなく曖昧になっていくのである。

作品の最後の文にも暗示は続いていく。次の引用は、イーヴリンの失踪時の言葉を借りて

フォードがワーターズらに説明するところである。

> She has escaped you absolutely, for ever and ever, as long as there are branches to shade *men* from the sun.85（斜体字は筆者による）

フォードがイーヴリンの言葉の“you”を“men”へと変えることによって、太陽神の同性愛的要素が暗示され、連想的にワーターズのセクシュアリティへと波及していくのである。

5．オイディプスから地霊へ

「アザー・キングダム」において父不在が際立っているということは、不在の父へのこだわり、あるいは、父の権威への抵抗を暗示することになるのではないだろうか。こうした解釈のヒントは、失踪したイーヴリンを探すためワーターズとインスキップがフォードを訪ねたとき、彼が『コロヌスのオイディプス』を読んでいたところに潜んでいる。

オイディプスの物語は後にフロイトの心理学の基になったように、「息子の父親殺し」と「息子と母親の近親姦」が中心テーマとなっている。父親殺しの神託を受けたライアスは生まれてきたオイディプスの踵に留め金を突き刺し、山に置き去りにするように命じた。しかし羊飼いに育てられたオイディプスは、父と知らずにライアスを殺し、また母と知らずにイオカステを娶る。その後、真実を知ってしまったオイディプスは、運命を呪いながら自ら両目をつぶした。ソフォクレスの手による『コロヌスのオイディプス』はその後日談である。娘に引かれてアテナイに着いたオイディプスは、その土地の地霊になるという神託を受け、コロヌスの森で死に場所を得た[9)]。

フォードはある意味でオイディプスと類似点を持っている。ワーターズはフォードの後見人であり、いわば「代理的な父」だといえる。そしてワーターズの婚約者イーヴリンは「代理の母」となるだろう。フォードがワーターズによって「踵」を引っかかれて倒されたことは、オイディプスのコンテクストに置き換えれば、「去勢の行為」だといえる。しかし、フォードはワーターズを侮蔑するという「父」の権威を侵し、さらには「母」なるイーヴリンを恋してしまうのである。その後、イーヴリンは「推測して」という謎めいたメッセージをフォードに残し、アザー・キングダムで消える。

フォードとオイディプスとの関連はここまでである。フォードはアポロンではなくダフネことイーヴリンから神託を受けることになる。ただし、この作品で地霊たる役割を担うのはやはりイーヴリンである。彼女の名前の連想は重要だ。フォースターが17世紀の王党派の文人であり庭園家であるJohn Evelynを知らぬはずはないからだ[10)]。このイーヴリンは森林問題を論じた書物*Sylva*（1664）を著し、ときの王チャールズ二世に献呈した。森林育成を訴えたジョン・イーヴリンを、アザー・キングダムを守ろうとするイーヴリンに重ね合わせ

ることはさして無謀なことではないだろう。加えて、JackがJohnのニックネームだということを思い出せば、フォード（ジャック）とイーヴリンは二人して、17世紀の森林論者の代弁者だともいえるだろう。森の中でブナの木に変身したイーヴリンとそれを解説するフォード。「アザー・キングダム」はジェンダー/セクシュアリティから解放された“absolute”な世界の体現者・語り部で終わる。フォースターは、ワーターズやインスキップの男性性を同定しない結末を選んだのでないだろうか。

注

1）*The Longest Journey*は最も人気がない小説ではあるが、作者が最も愛着を持った作品である。フォースターはその理由を“in it I have managed to get nearer than elsewhere towards what was in my mind—or rather towards that junction of mind with heart where the creative impulse sparks”と説明している（xxi）。自伝的要素の多いこの長編にフォースターの分身的人物が存在するのは当然であり、そこに彼の性的志向を知ることは可能だろう。

2）本稿での“Other Kingdom”の引用は*E. M. Forster: Collected Short Stories*に拠る。

3）*Howards End*はフォースターの第三作目の作品だが、1902~3年にすでに書かれていた。

4）評論集*Abinger Harvest*に収録されている。

5）例えば、ティーにいくら払ったのかと尋ねられたイーヴリンが「半ポンド2ペンス」だと答えると、ワーターズ夫人はしかめ面をし（66）、その後、そのティーは「飲めたものではなかった」（70）というエピソードは、アイルランド出身の彼女が英国のお茶文化に無知なことをほのめかしている。

6）“Greenwood”のテーマを論じたElizabeth Wood Ellemや、ペンギン版*The Longest Journey*の“Afterword”でこの長編の執筆過程を詳細に論じたElizabeth Heineによれば、フォースターは1905年にはすでに「アザー・キングダム」を執筆していたということだ（Elizabeth Wood Ellem, “E. M. Forster’s Greenwood”, 90; Elizabeth Heine, “Afterword” in *The Longest Journey*, 331）。いずれもKing’s College Libraryに所蔵されているフォースターの日記を調査したもの。日記の期日は1905年2月24日（Heine 331）。執筆時期から考えると、「アザー・キングダム」は『いと長き旅路』（出版は1907）とほぼ同じ頃、あるいは多少早い頃に構想、執筆されたと思われる。ダフネの変身譚を物語構造に利用した「アザー・キングダム」と類似した話は、『いと長き旅路』ではRickie Elliotが創作したことになったり、計画段階ではAnsellがFordという名前であったりするなど、両者には重なり合うところが各所に見られる。

7）フォードに血を出させるようなワーターズの暴力行為から、George Thomsonのように、*The Longest Journey*とは異なるものとして解釈する批評家もいるだろう（Thomson 78）。しかし*The Longest Journey*において、パブリック校時代RickieをいじめたGeraldや異父兄弟のStevenとの間にホモエロティックな感情を含ませたことを考えれば、本短編の暴力の解釈も曖昧になる。ジェラルドへのリッキーの身体的憧れについては、Robert Martin（261）を参照のこと。

8）Nicole M. Duplessisは、アーサーとグィネヴィアの関係は結婚生活の理想的なモデルとはいえないので、ワーターズが英文学の不完全な知識しか持っていないことを示唆していると指摘している（n. 20）。

9）拙論「“The Road from Colonus”における男性性とヘレニズム」では、オイディプスが「最期には英雄たる男性性を取り戻す」（63）と論じた。ソフォクレスの作品とフォースターの“The Road from Colonus”とを比較した場合、二人の男性主人公の結末は、男性性の回復と喪失という明白なジェンダー的差異として解釈できるためである。

10）Judith Scherer Herz も “Evelyn’s name is also hardly accidental, as it recalls Abinger that Forster would later celebrate in his Abinger Pageant” と論じている（33）。

文献

Duplessis, Nicole M. “Literacy and Its Discontents: Modernist Anxiety and the Literacy Fiction of Virginia Woolf, E. M. Forster, D. H. Lawrence and Aldous Huxley.” A Dissertation（August 2008）. 23, Feb. 2010 <http://repository.tamu.edu/bitstream/handle/1969.1/86028/Duplessis.pdf?sequence=1>.

Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. Oxford: Basil Blackwell, 1983.

Ellem, Elizabeth Wood. “E. M. Forster’s Greenwood.” *Journal of Modern Literature* 5: 1 (1976): 89–98.

Forster, E. M. *Abinger Harvest*. Harmondsworth: Penguin, 1967.

――――――. *Collected Short Stories*. London: Penguin, 1988.

――――――. *The Longest Journey*. Edited with Notes and Afterword by Elizabeth Heine. With an Introduction by Gilbert Adair. London: Penguin, 2006.

Herz, Judith Scherer. *The Short Narratives of E. M. Forster*. London: Macmillan, 1988.

Martin, Robert K. and George Piggford eds. *Queer Forser*. Chicago and London: The U. of Chicago P, 1997.

Smith, H. A. “Forster’s Humanism and the Nineteenth Century”. *Forster: A Collection of Critical Essays*. Ed. Malcolm Bradbury. Eaglewood Cliff, N. J: Prentice Hall, 1966. 106–116.

Thomson, George H. *The Fiction of E. M. Forster*. Detroit: Wayne State UP, 1967.

平林美都子「“The Road from Colonus” における男性性とヘレニズム」『愛知淑徳大学論集―文学部・文学研究科篇』33（2008）: 61–70.